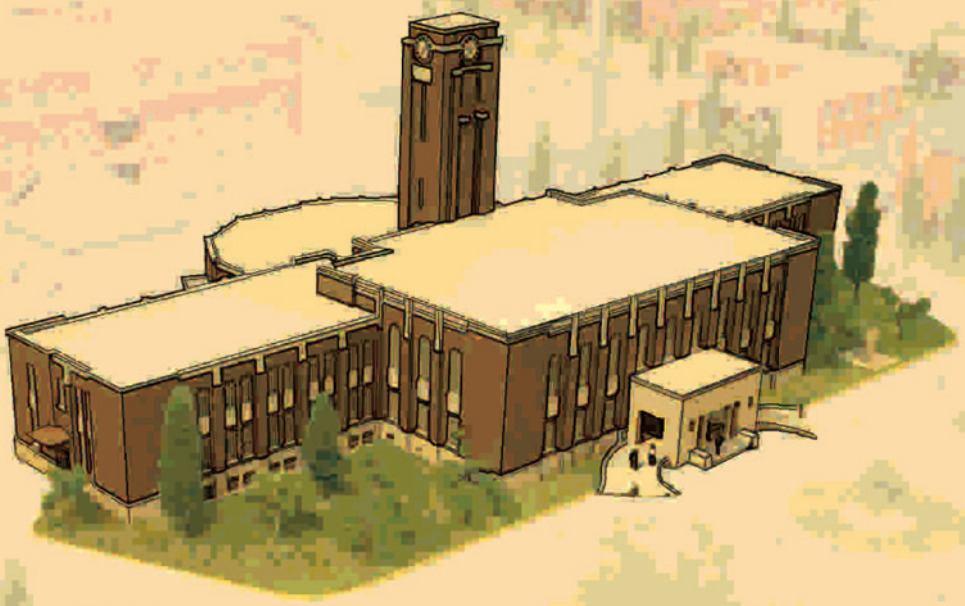
常設展

京都大学の歴史

Permanent Exhibition: The history of Kyoto University



編集　京都大学大学文書館

二〇〇三年一二月、百周年時計台記念館内の歴史展示室に、常設展「京都大学の歴史」がオープンしました。それから七年あまり経ち、このたび戦後改革以降の時期についてリニューアルを行いました。それに伴い、展示図録も改訂版を発行します。限られた頁数ではありますが、創立から法人化まで、展示されているそれぞれの時代の背景を読みとっていただき、展示についての理解をより深めていただけましたら幸いに存じます。

二〇一一年三月

Permanent Exhibition: The history of Kyoto University

目次

歴史展示室の概要 2
京都大学の創立 4
帝国大学と「大学自治」 6
帝国大学時代の学生生活 8
戦争と京都大学 10
戦前・戦後の学者たち 12
新制京都大学の発足と再編 14
戦後の学生たち 16
大学紛争 18
国立大学法人京都大学の発足 19
本部構内再現模型 20
戦前の学生下宿復元 22
映像ブース 24
略年表 25

裏表紙写真は、時計塔内部

京都大学の歴史

二〇〇三（平成一五）年一二月、八〇年近くにわたって京都大学のシンボルとして親しまれ続けた本部本館（通称時計台）が、京都大学創立百周年記念事業の一環として大規模な改修工事を終え、百周年時計台記念館として生まれ変わりました。百周年時計台記念館は、従来からの外観や内装の雰囲気はそのまま残しつつ、学会や講演会などを行う百周年記念ホールや国際交流ホール、迎賓室、会議室、大学文書館、レストラン、サロンなどを設け、学術交流および社会への情報発信の機能を果たすことになりました。そして、大学関係者や国内外の研究者だけでなく、一般市民の方々も自由に出入りできる日本の大学では類例の少ない施設となりました。

その百周年時計台記念館の一階には歴史展示室が置かれ、創立から百有余年の京都大学の歴史を様々な資料により分かりやすく示す場となりました。

歴史展示室の概要

歴史展示室では、常設展「京都大学の歴史」を展示しています。常設展は、様々な形で京都大学を訪れる来学者、学内の学生・教職員、卒業生などを対象として、正確な資料にもとづき、京都大学の創立以来の歴史と現状を広く知っていただくことを目的としています。なお、制作には、京都大学の歴史に関する資料を収集・整理・公開して調査研究するために学内に設置された大学文書館があたりました。

常設展は、通史展示を中心として、壁面に沿って創立から近年の京都大学まで八つのテーマを立て、一つのテーマにつき一台の展示ケースを使用しています。展示品としては主に大学文書館が所蔵する文書、写真に実物資料を組み合わせて、それぞれの

時代像を表しました（なお、文書資料については、資料保護のためすべて複製を使用しています）。そのほか、キャンパスや下宿の模型、CGなどの映像資料を展示して、多様な観点から京都大学の歴史を見ていただけるよう努めました。

また、常設展に隣接して、企画展示室と閲覧室を配置しています。前者は、京大の歴史に関する特定のテーマを立てて実施する企画展の会場として、後者は大学文書館が所蔵する様々な資料の閲覧の場として機能しています。常設展・企画展・資料閲覧の三者合わせて、京大の歴史を実感していただくことを願っています。

展示品内訳

種　類	数量（点数）
文　書	49
写　真	174
実　物	8
映　像	27
模　型	2
その他	4
計	264

『その他』は作図した資料を指す

京都大学の創立

The foundation of Kyoto University

一八九七（明治三〇）年六月、日本で二番目の大学として、京都帝国大学が創立された。帝国大学進学希望者の増加、日清戦争後の産業発展に伴う人材の必要性などが創立の背景として考えられるが、しばらく前から京都で展開されていた第二の帝国大学誘致の動きも見逃すことはできない。

二番目の大学として、先行の東京帝国大学との比較という観点は、京大自らも、そして周囲も意識せざるを得ないものだった。初代総長の木下広次は、最初の入学宣誓式において「当大学は東京帝国大学の支校にあらず又小模型にもあらず」と述べ、京大が「独得の資性」を持つ必要を強調した。そして木下は、自由な学問研究と学生の自主性を重んじた教育システムを京大の特徴としていくことを考えた。最初の卒業式では、木下は「本学は学生を待つに幼者を以てせずして大人君子を以てす」とその方針を説いている。

ユニークな教育システムは、法科大学（のちの法学部）に最も顕著に見られた。当時詰め込み式との批判のあった東大とは異なり、学生と教員の相互啓発を重視したゼミナール制の導入や、卒業論文の必修化を行い、また一方では科目選択の自由度を広げて学生の自発心や独創力の養成を目指した。第一期の学生で、のち教授になった佐々木惣一は、この教育システムについて「自由潑剌なるところの学問がやれるということにしよう、というお考えだった」と位置づけ、この制度では「選択とかは自分が自分で自信を持って選択する。従ってその結果に責任を持ちます。そういう趣旨であった」と回想している。

法科におけるこのシステムは、当時帝国大学に求められていた官吏養成に十分に応えることができずに結局挫折することになるが、今なお私たちに大学のあり方を問いかけていると言うことができる。

初代総長木下広次（1851～1910）
木下は熊本出身、第一高等中学校の校長として寄宿舎に自治を導入したことでも知られている。その後文部省専門学務局長として京大創立に関わり、初代総長に就任した。在任は10年にわたり、京大の制度・施設の整備に尽力した。

勅令第209号「京都帝国大学設置ニ関スル件」
1897（明治30）年6月18日に制定、22日に公布された。第2条にあるとおり、当初から法・医・文・理工の4分科大学（のちの学部）を置くことが計画されていた。（国立公文書館所蔵）

勅令第二百九號
第一條 京都ニ帝國大學ヲ置キ京都帝國大學ト稱ス
第二條 京都帝國大學ノ分科大學ハ帝國大學令第九條ニ依ラス法科大學醫科大學文科大學及理工科大學トス
第三條 京都帝國大學ノ分科大學及分科大學中ノ各學科開設ノ期日ハ文部大臣之ヲ定ム

朕京都帝國大學ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

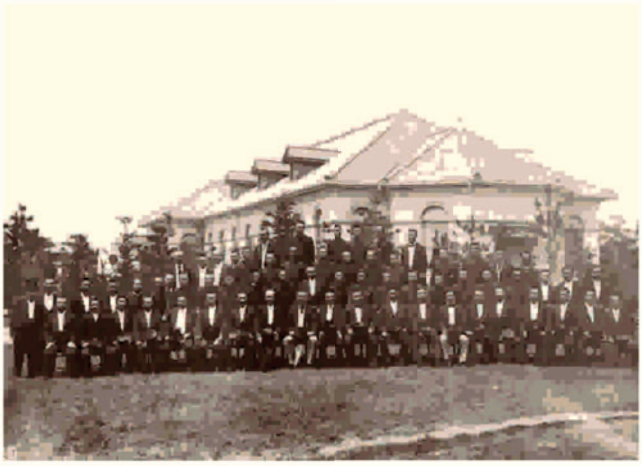
明治三十年六月十八日

内閣總理大臣伯爵 松方正義
文部大臣侯爵 蜂須賀茂韶

正門と理工科大学本館
理工科大学本館は、現在の時計台の場所にあった。京大創立以前にこの地にあった第三高等学校の本館を、三高が南隣に移転後そのまま使用した。煉瓦造り２階建ての重厚な建物だったが、1912年に焼失した。

第三高等学校

府立第一中学校



第１回卒業生（1900年7月）
卒業式後の記念写真。最初に置かれた理工科大学の土木工学科・機械工学科から合計29名が卒業した。この学年の入学者は47名だったので、標準の在学年限で卒業できた者は全体の約6割に留まったことになる。後ろに見えるのは、当時式典にも使用されていた図書館。

一中・三高・京大

京大の創立と前後して、京大のあった鴨川の東側地域には教育文化施設が次々と建設されていく。特に京大の南隣にあった第三高等学校、そのまた南隣にあった府立第一中学校は、当時の京都の「エリートコース」だった。ノーベル賞学者の湯川秀樹・朝永振一郎もこの一中ー三高ー京大というコースをたどっている。学生生徒の進学だけでなく、一中や三高では京大出身の若手研究者を多く採用していて、生徒たちに学問とともに京大の雰囲気を伝えていった。

帝国大学と「大学自治」

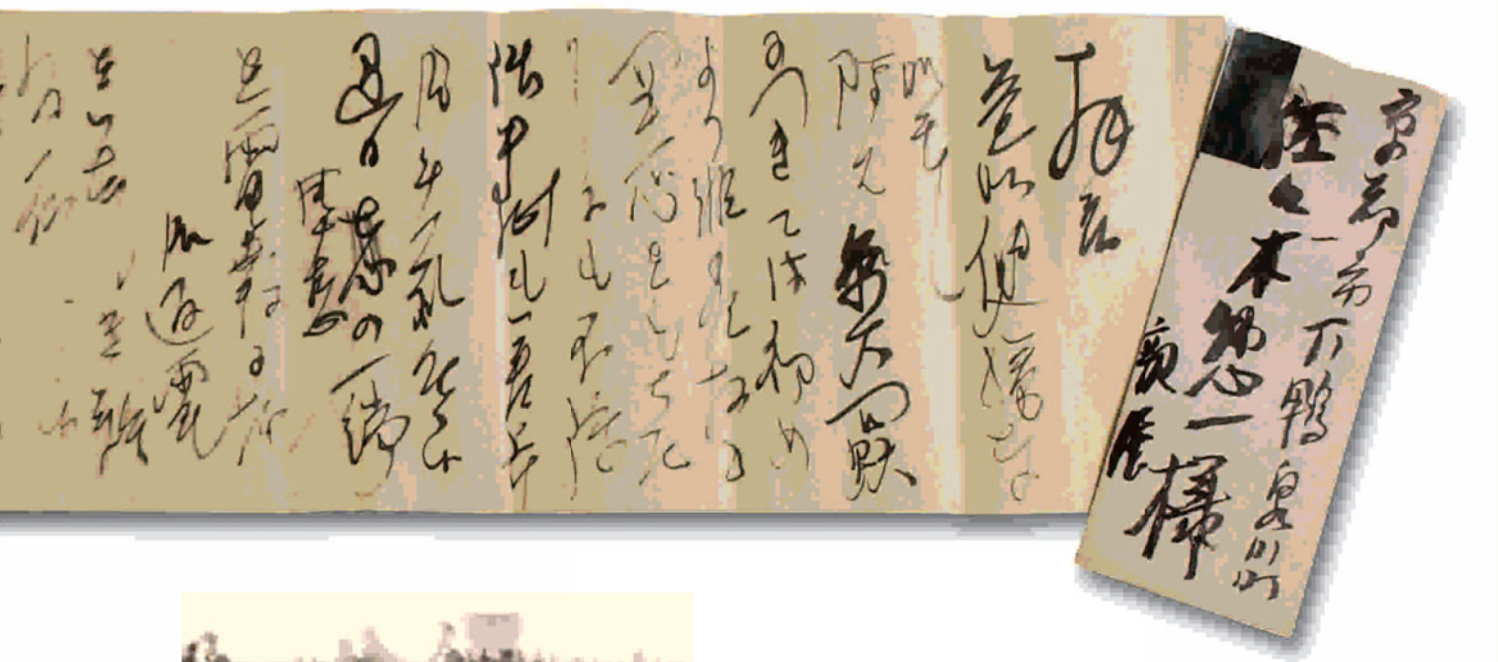
The Imperial University and academic autonomy

戦前の帝国大学は、国家の大学として機能する一方で、「大学自治」をめぐって国家との緊張関係も持ち続けていた。そこで問題になったのは、総長・学部長といった管理者の学内公選制と、学問の自由に密接に関連する教員の身分保障の二点だった。帝国大学が、学問研究の機関として確立していくのに伴い、学問研究の目的とされた「真理の探究」と国家の利害とが対立する側面が生じはじめてきたと言えよう。

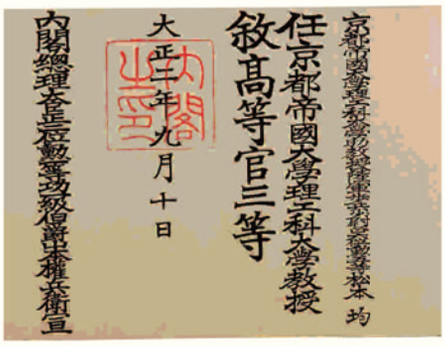
京大では、創立直後から、例えば理工科大学において分科大学長（現在の学部長に相当）の公選制が要求されるなど、「大学自治」獲得への動きは盛んであった。そのような流れの中に、岡田総長退職事件（一九〇八年）、沢柳事件（一九一三〜一四年）、初の総長選挙実施（一九一九年）などを位置づけることができる。

その京大で起こった近代日本最大の「大学自治」関連の事件が滝川事件である。一九三三（昭和八）年、法学部の滝川幸辰教授（刑法）の学説がマルクス主義的であるとして、文部省が休職を求めたのに対して、法学部教授会は大学の自治に反するとしてこれを拒否した。五月二六日に休職処分が発令されると、法学部全教官が総長に辞表を提出し、両者の対立は頂点に達した。その後、いくつか妥協策も模索されたが、処分は撤回されず、結局法学部の専任教官三三名のうち二一名が京大を去った（翌年までに七名が復職）。法学部は、滝川処分を撤回させられなかっただけでなく、文部省の分断策もあって「辞職組」と「残留組」に分裂するという二重の痛手を受けることとなった。

滝川事件において法学部が強調したのは、滝川個人の身分保障よりも、大学における学問研究の自由とは何か、国家と大学との関係をどのように考えるのか、という問題だった。当時の法的枠組みの中で、法学部は最も自由主義的に大学の役割を位置づけたが、戦時体制へと歩みを進める日本社会で、そのような主張が受け入れられることはなかったのである。



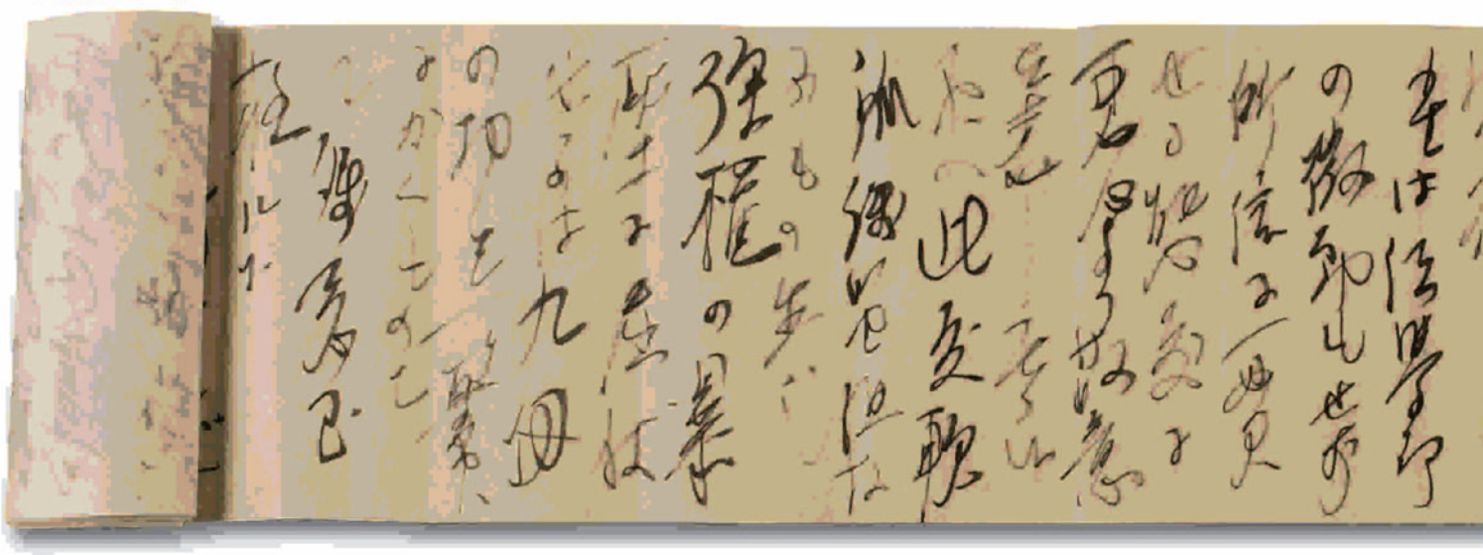
入学宣誓式（1928年）
帝国大学では、荘重な儀式が多く行われ、国家の大学としての権威を示していた。入学宣誓式では、学部の場合は学部長の前で、大学院の場合は総長の前で一人ずつ宣誓簿に署名していった。写真は大学院入学宣誓式。左側は荒木寅三郎総長。



教授任命の辞令（1913年）
内閣の印が捺され、総理大臣が宣する形式をとっていた。ちなみに当時の帝国大学教授の給与は、新任の教授で年1500〜1800円程度で、大卒社員の初任給が月額30円程度であったことに比べると、かなり高額であった。

辞表提出後、法学部学生大会で学生に別れを告げる宮本英雄法学部長（1933年5月26日）
滝川事件に際して、全学の学生たちは、法学部教授支持、文部省批判の運動を繰り広げていた。滝川の休職処分が決定すると、法学部全教官は総長に辞表を提出、その後、ちょうど開催されていた法学部学生大会において多数の学生たちの前で辞職声明書を読みあげた。

岩波茂雄書簡：佐々木惣一宛
岩波は、事件当初から法学部を強く支持していた。法学部の中心人物でかねてより交流のあった佐々木惣一宛のこの手紙では、「法学部の微動もせず所信に一貫せる態度に衷心より敬意を表し居り候」としながら、「残留組」の出現については「九仞の功を一簣にかくものとして残念至極」と述べ、滝川の復職がないならば総辞職するべきであると強調していた。



時計台の竣工

京大のシンボル的な建物として知られる時計台は、一九二五年に竣工した。一階には全学で最大の教室だった法経第一教室があり、二階には儀式を行う大ホール、総長室、貴賓室などが配置されていた。その後大学の事務部署が入っていたが、二〇〇三年百周年時計台記念館に改修され、社会に開かれた情報発信の場として生まれ変わった。（写真右は竣工間もないころの時計台）

帝国大学時代の学生生活

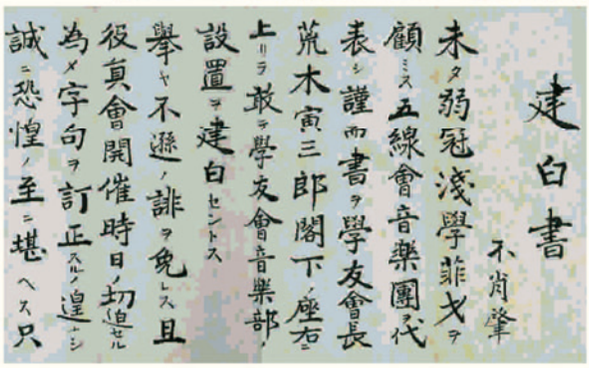
Student life in the Imperial University days

帝国大学の学生たちが、日々学業に励む生活の中で、最新の知識を吸収しようと努めていたことはいうまでもない。しかし、スポーツや芸術、文化といった方面においても、それに近い気概を持っていたことはあまり知られていない。

スポーツに関しては、現在では、実業団や私立大学などに大きく水をあけられているが、この時期には帝国大学の運動部が日本のスポーツ界をリードしていた。例えば陸上部からは何人ものオリンピック選手を輩出しており、その一人である田島直人は、ベルリンオリンピックで金メダルを獲得した。また京都帝大の学友会はインターハイ（高等学校や専門学校の各運動部による対校試合）を主催し、後進の育成や優秀な選手の確保に力を入れていた。

文化方面に関しても同様である。一九一七年に創設された音楽部（後の交響楽団）は、ロシア人指揮者エマヌエル・メッテルの指導の元で数々の難曲をこなし、朝比奈隆らを輩出したことで知られているが、この音楽部の設立を求めて総長に提出された「建白書」には「顧みて一度国民の趣味的精神の未だ低級にして泰西文明国人の畛域を距ること尚遠きに想到すれば転た長太息を禁ぜんと欲するも能はざるなり音楽趣味の如き豈其好例に非ざるなからんや 抑近き将来に於て国家の先達たり師表たるべき大学生が真に高尚なる音楽趣味に対する理解力を有するの必要なるは吾人の言ふを俟たざるところなり」などとあり、日本の音楽趣味までをも背負って立とうという強いエリート意識が感じられる。

音楽部演奏会風景(1936年)
指揮はエマヌエル・メッテル。ベートーベンの「交響曲第五番」を演奏。京都朝日会館にて。



建白書

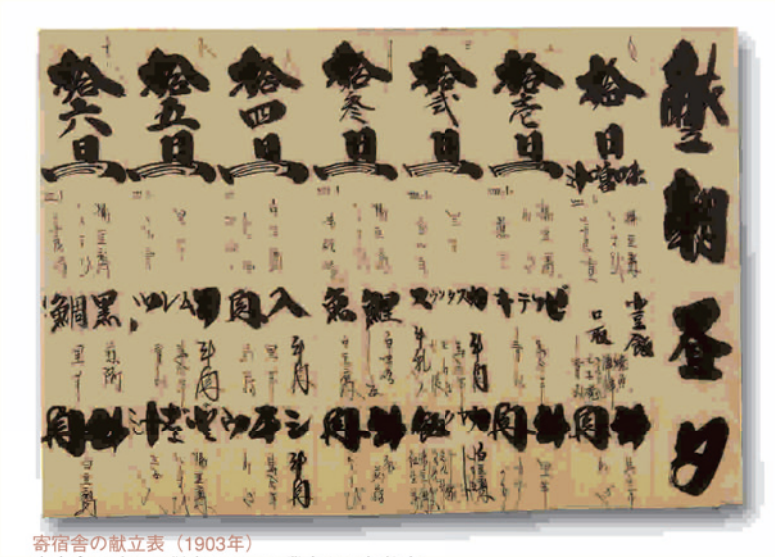
不肖肇

未タ弱冠淺學菲才ヲ顧ミス五線會音樂團ヲ代表シ謹而書ヲ學友會長荒木寅三郎閣下ノ座右ニ上リテ敢テ學友會音樂部ノ設置ヲ建白セントス

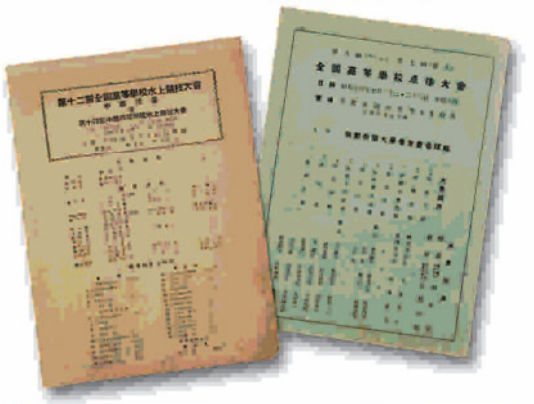
擧ヤ不遜ノ誹ヲ免レス且役員會開催時日ノ切迫セル為メ字句ヲ訂正スルノ遑ナシ誠ニ恐惶ノ至ニ堪ヘス只

音楽部設置を求める建白書(1916年)
3メートル近い奉書紙に約100行にわたって記されている。

理学部卒業論文（1917年［右］、1924年［左］）
毛筆で縦書きにしたもの(1917年)とタイプライターを用いて英文で執筆したもの（1924年）。実験結果を示す図表も美しく描かれている。



寄宿舎の献立表（1903年）
寄宿舎の賄いに従事していた業者との契約書類に含まれていた献立表である。別紙の「賄方調員心得」には、原則として毎日一回牛肉または鶏肉を出すことなども定められている。実際この献立表の中には、シチュー（第五日夕食）、ビフテキ（第二日昼食）などのメニューが並んでおり、当時としてはかなり豊かな食生活であったと考えられる。



インターハイパンフレット（1939年）
京大総長が総裁、あるいは会長となっている。

第一回陸上運動会（1899年）
明治期の大学スポーツとしては、学内の学部対抗試合を中心とした運動会が盛んであり、総長が会長を、教授陣が審判員を務めるなど、全学を挙げて大規模に行われた。現在の時計台北側のあたりで実施。

京都帝國大學新聞

明るみに出た大學生の赤裸々な生活狀態
學費月額五百圓のブル學生と飢餓線上を彷徨ふ苦學生の群
共濟部生計調査發表さる

學生の貧困化を語る
求職者群の激增
共濟部職業紹介の現狀

今度の宣誓式
來る十一日

結婚紹介
大野氏へ申込め
養子を求む
嫁入りたし

恐慌期の厚生事業

一九二〇年代後半には、学生の生活難が問題となり、これが思想に与える影響が懸念されたこともあって、さまざまな厚生事業が行われた。学友会共済部や学生課は、生計調査、内職（アルバイト）や就職、奨学金などの紹介、さらには結婚の紹介をも行った。上は共済部が行った「学生生計調査」の結果を報じて苦学生の増加を取り上げたもの（一九二九年）。下は学生主事が結婚紹介を行っているので希望者は申出よとの記事。「養子を求む」、「嫁入りたし」それぞれに年齢や学部の希望条件が付されている（一九三二年）。（いずれも『京都帝国大学新聞』）

戦争と京都大学

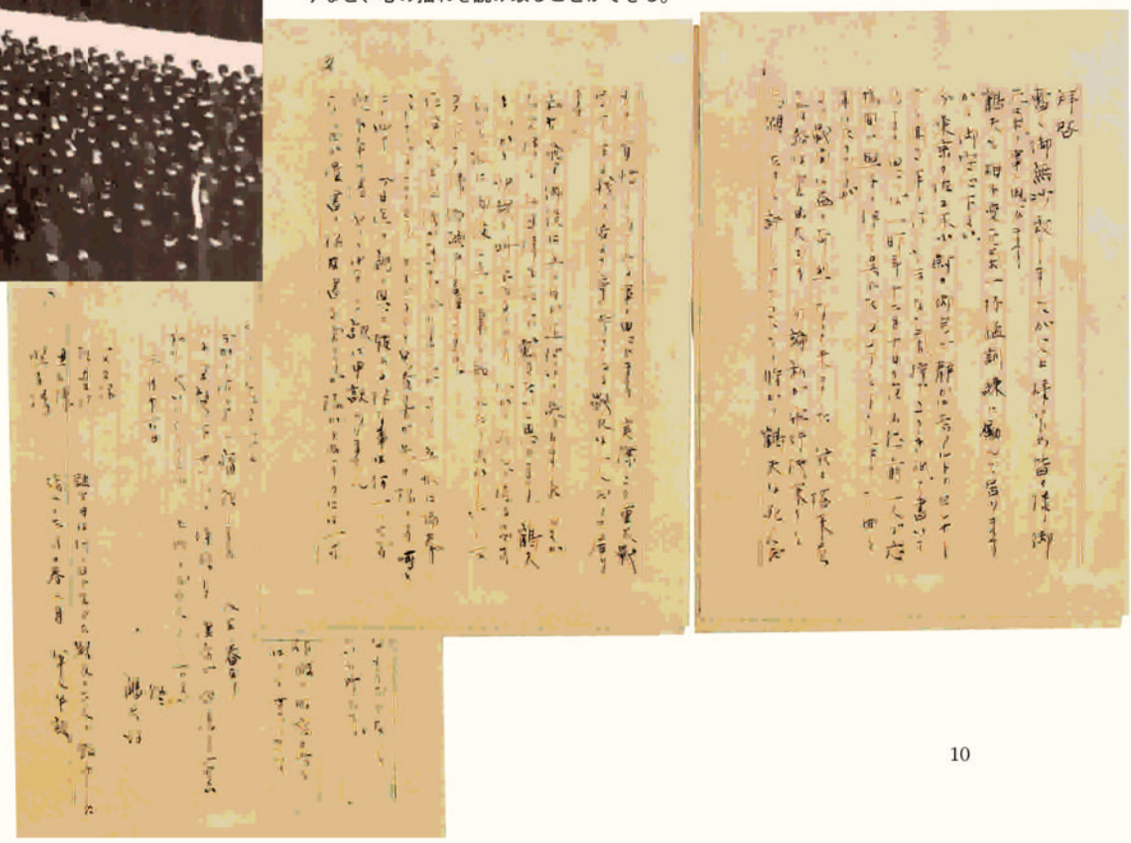
Kyoto University during wartime

一九四三（昭和一八）年一〇月、それまで認められていた学生生徒の徴集猶予の権利が廃止され、文系学部を中心に満二〇歳以上（翌年から一九歳に変更）の学徒は陸海軍に入隊することになった。これが「学徒出陣」である。すでに一九四一年から大学の修業年限が短縮され、卒業を繰り上げられた学生たちが次々と徴集されていたが、この段階から在学中の学生にも及ぶようになった。京大でもこの時、文・法・経済の各学部と農学部の半分の学科から合計約二〇〇〇人の学生が入隊した。さらにこの前後の時期も合わせると、約四五〇〇人が在学の身分のまま軍隊へ行っている。

当時の京大生の大部分は旧制高等学校を経て大学に入学していた。それぞれ独自の校風を持ち、生徒たちに大きな影響を及ぼした旧制高校においては、彼等は総じて戦争とは無縁の自由な学園生活を楽しんでいた。しかし彼等が京大に入る前後から、次第に戦局が深刻化してくる。「大本営発表」により、本当の状況が隠されていたにもかかわらず、在学中友人と「もうこの戦争は勝つのは無理じゃないか、負けるか、食い下がって引き分けに持ち込むかどちらかじゃないか」（京都大学大学文書館の行った聞き取り調査より）と、不利な戦局についてある程度察している学生が多かった。

彼等の多くは一九二〇年代前半の生まれであり、自らの成長と戦争の拡大や総動員体制の深化が同時並行で進ん

学徒兵から家族宛の手紙（1945年3月16日付）
この手紙を書いた学徒兵は、経済学部在学中に海軍に入り、操縦士としての訓練を受けたのち、特攻隊に編成され九州東南の海上で戦死した。この手紙を書いたときにはすでに特攻に指名されており、死の覚悟を述べながらも入隊前夜に家族と過ごした時間を想い起こすなど、心の揺れを読み取ることができる。



でいた。「この年代に当たった人間というものの行きがかりみたいなものを考え」（同前）て、過酷な運命を受け入れていったと言えるかも知れない。

そうしたときに彼等の支えになったのは、国家や天皇といった抽象的なものではなく、「おれが血肉をわけた愛しき人々と、美しい京都のために、闘おうとする感情がおこる」（林尹夫『わがいのち月明に燃ゆ』より）とあるように、家族や恋人、郷土という具体的なものを守るために戦うのだ、という気持ちだったと語り残した学生もいる。

在学中の戦没者は二〇〇人を超えるが、卒業生も含めた数となると、この何倍になるか未だに不明である。その中には特攻隊に配属された者もいる。また、幸いに戦後復学できた学生にとっても、この体験はその後の人生に深い刻印を残すものとなった。

設置当初の結核研究所
戦局の拡大とともに、京大でも国策に応じた研究体制が形作られていき、新しい研究所や学科が置かれたほか、中国大陸や「南方」についての研究も盛んに行われた。結核研究所は1941年に設置され、当時国民病と言われていた結核の予防と治療についての研究を目的とした。当初は、医学部附属医院内の建物を応急的に使用した。

壮行式のあと、構内を行進する出陣学徒（1943年11月20日）
京大から入隊する学徒の壮行式が農学部グラウンドで催され、式の後学生たちは構内を通って平安神宮まで行進した。

時計台前広場で行われた対米英宣戦布告詔書捧読式（1941年12月10日）
この時期、戦意高揚や一体感の強化を目的に戦勝祝賀式や戦没者慰霊祭といった行事が数多く学内で催された。こういった行事には、学生たちは必ずしも積極的に参加していたわけではないようだが、自由度の高かった大学生活も少しずつ変わり始めていた。

学旗・学歌の制定

学旗・学歌は、一九四〇年に制定された。この前年に出された「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」の趣旨に応える方法として計画されたもので、学旗の意匠と学歌の歌詞は応募作品の中から選ばれた。

（写真は一九四〇年二月一一日の学旗学歌制定式の様子）

戦前・戦後の学者たち

Prewar and postwar scholars

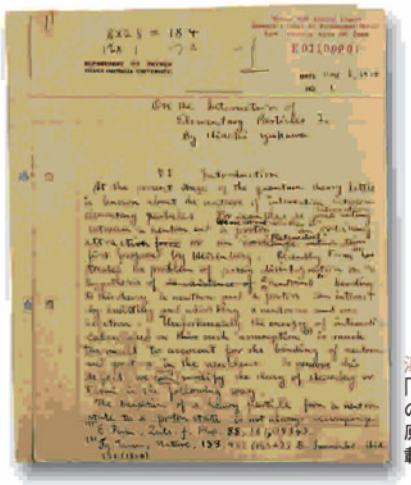
西田幾多郎は、四高や学習院の教授を経て一九一〇（明治四三）年に京都帝国大学の助教授に就任した。その翌年『善の研究』が刊行され、ついで一九一三年には哲学哲学史第一講座の教授に昇任した。西田は、独創的な哲学研究を展開しただけでなく、教育や人事による教室の充実にも腐心していて、そうして迎えられたのが、東北帝国大学で教鞭を執っていた田辺元である（一九一九年助教授就任）。戦前期を通して、西田・田辺の著書は広く読まれ、彼らに憧れて京都帝国大学に入学した者も少なくなかった。

二人を中心として形成された一群の哲学者たちは「京都学派」と呼ばれたが、それぞれの研究や立場は多様である。「京都学派」は、戦時中は帝国主義的膨張政策に批判的であるとして国粋主義者や陸軍から敵視された一方、日本の戦争を歴史的文脈のなかで必然的なものと位置づけたことや海軍への協力が戦後に非難されるという立場にあった。しかし、西洋文明の世界化への非西洋の関わり方についての彼らの問題提起は、現在においても有効性を失っておらず、多様で相互に触発しあった「京都学派」の研究者は今でも魅力的であると言える。

湯川秀樹は、東京に生まれたが生後間もなく京都に移り、以後一中―三高―京大と京都のエリートコースをたどった。京大卒業後玉城嘉十郎教授の研究室に残り、朝永振一郎（一九六五年ノーベル賞受賞）らとともに、当時変革期にあった量子力学の研究を続け、一九三三年ごろからノーベル賞受賞の対象となった「中間子」に関する研究に着手した。その研究は「素粒子物理学」という新しい領域の創造を意味する画期的なものであった。

大阪帝国大学助教授を経て一九三九年京都帝国大学理学部教授に就任、一九四九年に日本人として初めてノーベル賞を受賞、敗戦後自信を喪失していた日本人に希望を

西田幾多郎『日本文化の問題』（右）と田辺元『歴史的現実』（左）
「日本文化の問題」は1938年に公開講座として、「歴史的現実」は翌1939年に学生課主催の「日本文化講義」の一つとして行われた。ともに大きな評判を呼び、学生課叢書として刊行された。（京都大学附属図書館所蔵）

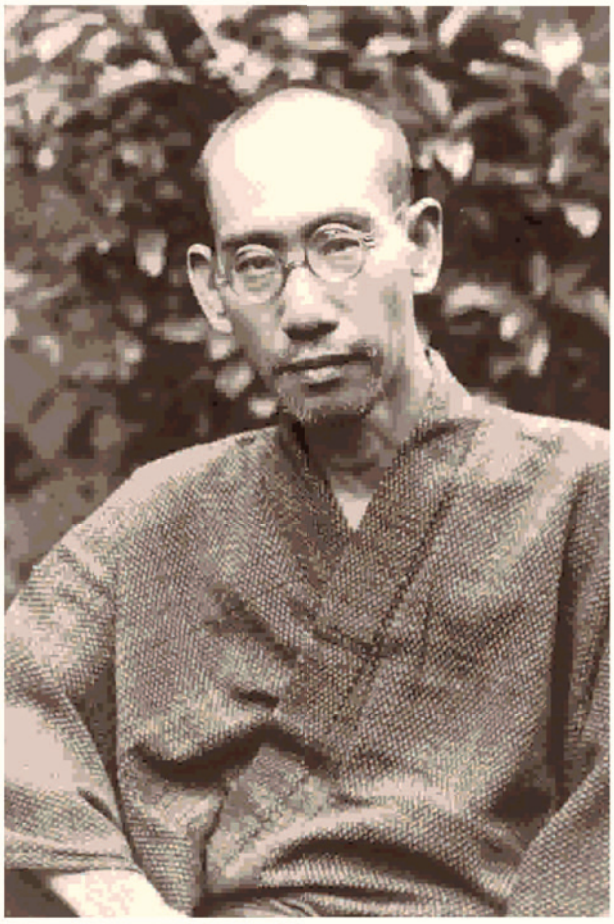


湯川秀樹の中間子論第Ⅰ論文原稿
「中間子論」の最初の論文。1934年11月17日の日本数学物理学会において発表され、この原稿は翌年2月発行の同学会欧文機関誌に掲載された。（京都大学基礎物理学研究所所蔵）

与える存在となった。その後、日本で初めての全国共同利用研究所である京都大学基礎物理学研究所の初代所長を務めたほか、アインシュタインなどとともに核兵器の廃絶を唱えて平和運動にも尽力し、科学者としての立場から政治に対して積極的に発言するなど、物理学のみならず社会にも大きく貢献した。

西田と、湯川を中心とした理論物理学者との間には幾重もの関係がある。朝永振一郎の父三十郎は哲学史を専攻し、西田と文学部の同僚であっただけでなく、強い信頼関係のもと京大の哲学を隆盛に導いていったことはよく知られている。また、西田の次男外彦は理学部で湯川らの先輩にあたり、やはり量子論を勉強していた。そしてなにより湯川本人が、学生時代文学部へ行き西田の哲学概論の講義を欠かさず聴講し、後年にはしばしば西田の自宅を訪問する関係になった。「哲学と理論物理学とは、大昔は一つであった。今では、ずいぶん離れてしまった。しかし西田先生とお話ししている瞬間だけは、両者の距離が大分近くなっているような感じがした」（『旅人』）とは湯川の回想である。

湯川秀樹（1907〜1981）



西田幾多郎（1870〜1945）

会議で語らう湯川と朝永（1906〜1979）
（京都大学基礎物理学研究所所蔵）

田辺元（1885〜1962）

新制京都大学の発足と再編

The Launching and Reorganization of Kyoto University under the New University System

戦後の教育改革によって、高等教育は「少数者の権利」から「多数者の機会」へと替わり、一九四八年から四九年にかけて全国に多数の新制大学が発足した。新制京都大学もその一つであった。

新制大学では一般教育が重視され、京大ではそのための組織として分校（一九五四年から教養部）が設置された。新制の大学院も一九五三年に設置され、新しい教育制度が整えられていった。さらに、高度経済成長期に入ると工学部を中心に学生数が急増、附置研究所やセンターが次々と設置されるなど、京大は拡充の一途をたどっていた。

しかし、次第に大学内部においては進学者の増加に対する受入態勢の不備が表面化し、大学外部においては高度成長のひずみやベトナム戦争に象徴されるように科学技術のあり方や社会と大学との関係が問われるようになってきた。一九六〇年代末に多くの大学で発生した大学紛争は、そのような問いを深める可能性をもっていたものとも言える。

紛争以後、京大では教育・研究体制の再編が始まった。教養部を中心とする一般教育の改革や学部をもたない大学院の設置、新キャンパスの整備などは長い時間をかけて学内で検討された。その他にも、国際交流や社会との連携の推進、情報基盤の整備、環境保全や人権保護など多くの課題に取り組んでいくことになった。こうした取り組みは、一九九〇年代の大学改革に引き継がれ、具体化していくことになる。

［写真右上］吉田分校正門
第三高等学校時代の施設をそのまま利用した吉田分校では2回生が学んだ。現在の吉田南構内。

［写真右下］宇治分校
1回生は、旧陸軍火薬庫跡（現在の宇治キャンパス）に置かれた宇治分校で学んだ。当時の総長は、専門教育から離れた場所で旧制高等学校のような雰囲気で教育を行うことを構想していたが、環境が悪く不便でもあったため1961年に廃止された。

桂キャンパス
吉田キャンパスの狭隘化にともなう新キャンパスの検討は1980年代前半から始められ、2003年11月、京都市西京区に桂キャンパスが竣工した。工学研究科などが移転し、テクノロジーとサイエンスが融合するテクノサイエンスヒルの形成を目指している（2011年1月撮影）。

本部構内
1977年撮影。1960年代から70年代前半にかけて行われた工学部・法学部などの改築が一段落した時期である。

第三高等学校の廃校

第三高等学校（三高）は、明治二年に大阪に開講した化学の学校である舎密局（せいみきょく）を源流としている。その後何度かの改編を経て京都に移転し、独自の「自由の校風」を作り上げていった。戦後の教育改革で旧制高等学校は廃止されることになり、三高も京大に合同して廃校、教員の多くは分校・教養部に配属された。（写真は一九五〇年三月三一日、三高最後の日にはずされる校銘板）

戦後の学生たち

Students in the Post-War Period

戦後の教育改革によって、大学のありようは劇的に変わったが、学生に関して言えば少なくとも京大においては一九六〇年代前半頃まで大きな変化はなかったように見える。学園祭や園遊会での学生と総長や教員との密接な交流にその一面を垣間見ることができるし、時に大学当局と激しく対立した学生運動においても、その学生たちには自らが社会を導くという自意識があったように感じられる。

しかし、高度経済成長、ベビーブーム世代の入学、そして大学紛争を経て、学生たちの気質は次第に変わっていく。生活が豊かになり、住居は賄い付き下宿からワンルームマンションに移り、服装は制服姿からジーンズをはじめカジュアルなものへ変わり、自分の自動車を持つ学生も珍しくなくなった。それとともに、個人のライフスタイルは個別化・多様化し、学生と教員、あるいは学生相互の連帯感は薄れていった。

近年の「学力低下論」に代表されるように、社会が学生を見る目も厳しさを増してきている。戦後間もない頃、増加する新制大学を揶揄した評論家大宅壮一の「駅弁大学」から始まって、戦後の大学や大学生は批判や諷刺の対象となることが少なくなかったが、最近のそれは進学率五〇％を超える現在の大学と、旧来の大学イメージとの間に未だにギャップがあることから生まれているとも言えよう。

大学生とは、その時々の社会を最も正直に反映する存在でもある。感情的な評価ではなく、学生たちの姿を冷静に捉えていくことは戦後そして現在の社会を理解する一つの鍵となるであろう。

学生のスナップ（1948年4月）
農学部本部屋上にて。敗戦直後のキャンパスでは、様々な服装の学生が見られた。学生が履いているのは払い下げの軍靴。困難な時代だったが、笑顔が印象的である。

破壊活動防止法反対でデモ行進する学生（1952年6月5日）
1940年代末ごろから、冷戦体制の進行とともに学生運動は急速に政治色を強めるようになり、デモやストライキも盛んに行われた。破壊活動防止法制定をめぐっても、規制が学生運動に及ぶことを懸念した学生たちによる反対運動が展開された。

下宿の引っ越し（1960年ごろ）
家財道具一式をリヤカーに積んで運んだ。

入学式（1983年）
入学式・卒業式は1972年度から2008年度まで総合体育館で行われた。1983年の新入生は2,537名、1950年代末から60年代にかけて学生数は急増したが、このころは増加は落ち着きを見せていた。

十一月祭の成り立ち

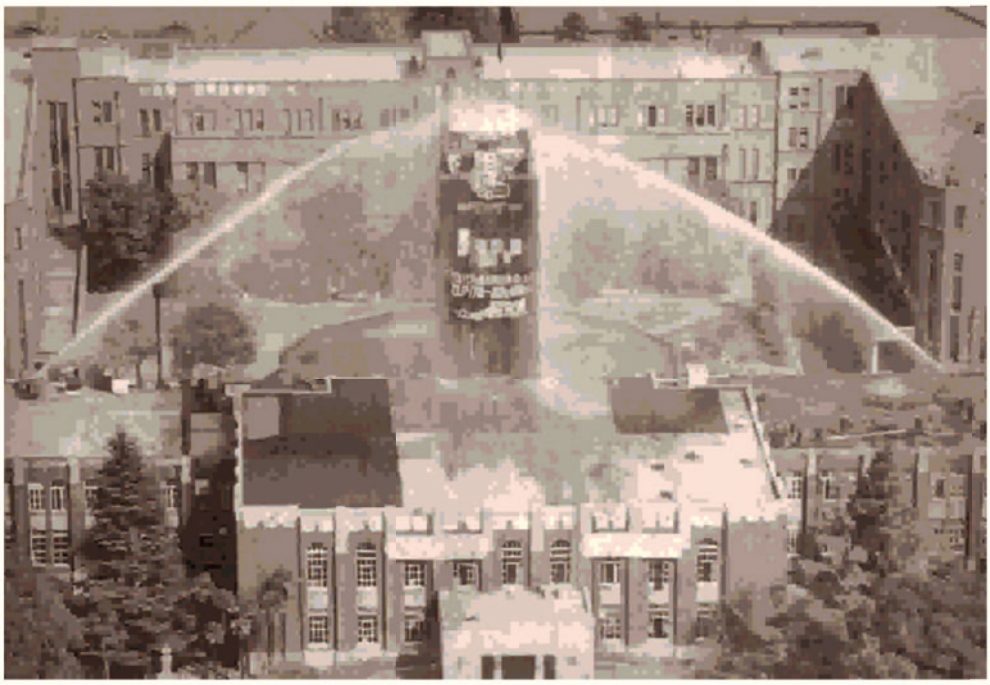
戦前の園遊会以来の流れを引き継ぎ、一九四八年に戦後最初の「文化祭」が催された。当初は春と秋の二度開催されていたが、一九五三年から秋に一本化し、同時に学生たちによって「十一月祭」と称されるようになった。事前に行われる仮装行列も話題を呼んだ。（写真は一九六二年の十一月祭における仮装行列で平沢総長の顔の張りぼてをかついで行進する学生たち）

大学紛争

Student revolt

一九六八（昭和四三）年頃から、東大や日大など全国の大学で学生たちの闘争が本格化してきた。京大における大学紛争は、東大安田講堂の封鎖解除と入れ替わるように、一九六九年一月の学生部封鎖から始まった。大学側の方針は説得による封鎖解除だったが、学内の封鎖解除派の実力行使を容認する格好になり、二三日には封鎖は解除された。このような自力解決を目指すやり方は「京大方式」と言われたが、警察に頼らない反面、学生間の対立を激化させる結果ももたらした。

その後、教養部や多くの学部ではバリケードが築かれ、ストライキが打たれるようになり、全共闘派と封鎖解除派の学生同士の衝突も度重なり、通常の教育研究は不可能な状況になった。一九六九年度の入試は学外に会場を移して行われたが、卒業式は中止、入学式も開始直後に全共闘派の学生が乱入して、わずか一分で終了を余儀なくされた。新学期の授業もほとんど行われず、紛争が長期化する状況を見て、大学側は警察力による封鎖解除を行うこととし、九月二一、二二日の両日で時計台を含むすべての建物の封鎖は解除された。以後一二月までには全学で授業が再開され、ようやく学内は沈静化にむかうこととなった。



時計台封鎖解除の光景
（1969年9月21日）
機動隊約2000人が出動した。
（写真提供／京都新聞社）

入学式の様子（1969年4月11日）
全共闘派の学生の乱入によって、わずか1分で終了した。会場は時計台2階の大ホール。

正門に築かれたバリケード（1969年1月）
学生部封鎖という事態に対して、学内での解決を目指した大学側は学外者の構内立ち入りを禁ずるため、本部構内入口にバリケードを築いた。したがって、構内に学生部を封鎖した学生とそれを取り巻く大学側と封鎖反対派、大学の外を封鎖支援派が取り囲むという構図が一時的に生まれた。

国立大学法人 京都大学の発足

The Inauguration of Kyoto University as a National University Corporation

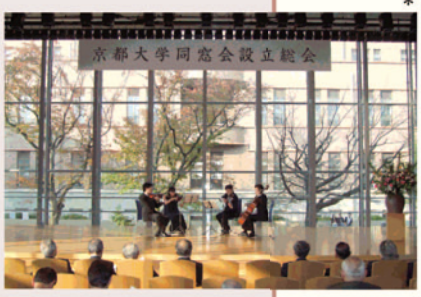
二〇〇四年四月、全国八七（当時）の国立大学が一斉に法人化され、京都大学も「国立大学法人京都大学」となった。法人化の議論は一九九〇年代以来の大学改革の流れに行政改革の観点が加わった形で行われていった。法人化された大学においては、大学運営の自由度が一定程度拡大するとともに、学長（総長）に種々の権限が集中するようになった。また、自由度の拡大に伴って第三者評価を伴う目標管理も行われるようになった。法人化によって社会との連携や先端的研究への助成などは活性化したとされるが、基礎研究がなおざりにされる危惧や大学間格差の拡大を懸念する声もある。

■ 近年の京都大学略年表

1991 年	4 月	大学院人間・環境学研究科設置
1992 年	4 月	全学共通科目開講
	4 月	法学部、大学院重点化（以後各学部で重点化）
	10 月	総合人間学部設置
1993 年	3 月	教養部廃止
1997 年	10 月	京都大学国際教育プログラム（KUINEP）開講
1998 年	4 月	新入生向け少人数セミナー（ポケットゼミ）開講
2001 年	12 月	「京都大学の基本理念」制定
2003 年	11 月	桂キャンパス竣工
	12 月	百周年時計台記念館竣工
2004 年	4 月	国立大学法人京都大学発足
	4 月	大学院法学研究科法曹養成専攻（法科大学院）設置
2005 年	9 月	京都大学ジュニアキャンパス開催 ＊
2006 年	3 月	学生表彰制度「京都大学総長賞」第 1 回表彰
	9 月	女性研究者支援センター設置
	11 月	京都大学同窓会発足 ＊
2007 年	3 月	京都大学基金創設
	7 月	産官学連携本部設置
2009 年	2 月	ロンドンに産官学連携欧州事務所開設
	9 月	東京都港区に京都大学東京オフィス開設
2010 年	4 月	次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」発足
	4 月	iPS 細胞研究所設置 ＊
	9 月	ハノイに「京都大学－ベトナム国家大学ハノイ協同事務所」開設

＊

＊



＊

本部構内再現模型

歴史展示室の中央に、一九三九（昭和一四）年当時の本部構内を一五〇分の一の模型で再現した。

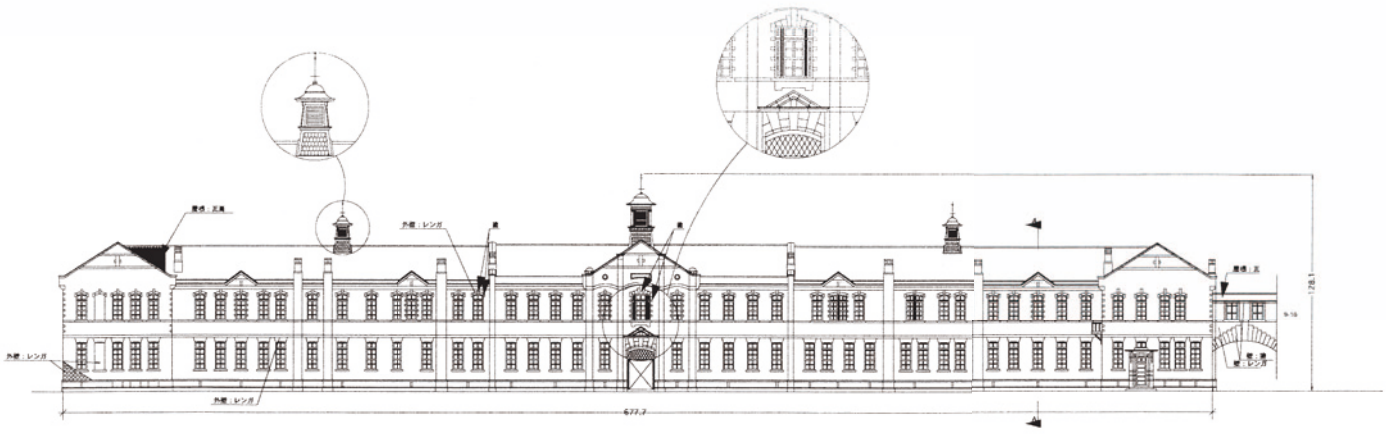
一九三九年を選んだのは、これ以後敗戦をはさんだ時期の資料が非常に乏しいということと、キャンパス自体がいわば荒廃してくる（例えば煉瓦造りの一階に木造の二階を接合させるといった付け焼き刃的な建物が出現したり、延焼を防ぐため渡り廊下が取り壊されたりした）ので、結果的ではあるが、この時期が戦前の京大キャンパスの完成期だったことが理由として挙げられる。このキャンパスは、高度成長期に次々とむき出しの鉄筋コンクリートの建物が造られるまで全体としては維持されていたものである。なお、京大のキャンパス模型ということであれば、医学部・病院・北部といった他の構内についても制作するべきであったが、展示室内のスペースと縮尺の関係から断念せざるをえなかった。

制作にあたって資料として主に使用したのは、施設部所蔵の図面と大学文書館所蔵の写真である。制作した一四〇点あまりの建造物のうち、ほぼ九割近くは何らかの形で図面か写真が現存していた。とはいえ、そのほとんどは断片的なものであり、どの建物のどの部分のものなのかということを特定する作業が必要であった。それらの図面や写真をコンピュータ上に読み込んで、模型用の図面（図参照）を作り、何回かの校正を経て実際の模型を作成するという手順をとった。最も困難を覚えたのは建造物の色であり、写真はモノクロである上に図面には色合いについての記載はなく、現存している建物の色や僅かな文献資料を手がかりに、なるべく正確に再現するよう努めた。

この時期の建造物は、装飾性に富み、個性が豊かである。その一方で、正門から時計台入口、法経本館入口、化学教室入口へと続く線を中心とした整然としたプランのもとに、キャンパス全体が設計されていることも分かる。学生の数も少なく、まだ大学に余裕があった時代のキャンパスである。

1939年当時の本部構内模型（1／150に縮小）

模型制作用の図面。図面は理学部化学教室のもの。この建物は1914年竣工、本部構内の北西にあり、京大の代表的な赤レンガ建築の一つだった。



南立面図

戦前の学生下宿復元

時代・人物設定と書棚

この下宿に住む学生の人物像を一九三〇（昭和五）年ごろの経済学部学生と設定した。彼は、当時の多くの経済学部学生がそうであったように、マルクス主義思想で知られた経済学部教授の河上肇に憧れていたが、入学直前の一九二八年、河上はその思想を理由として大学を追われていた。

この復元された下宿においては、書棚に並べる書物に、このような人物像や、昭和初期の読書事情を反映させることに重きをおいた。この時期には、主に学生を対象として比較的安価な書物が刊行されるようになった。一九二六年に、改造社の『日本文学全集』が一冊一円という従来の書籍の半額以下で売り出されて円本ブームを引き起こしたことを踏まえて、この書棚には『第32篇　近松秋江集　久米正雄集』『第50篇　新興文学集』を置いた。また最上段には文庫本を並べたが、日本初の文庫本シリーズとされる岩波文庫が、古典や学術書を中心に収めて創刊されたのが一九二七年であり、その後一九二九年には、これに対抗する形で社会主義関係の著作を多く収めた改造文庫が創刊されたことを反映させている。

さらに、当時の京都帝大の教授陣の著作を中心に経済学の専門書も並べた。河上肇の『資本論入門』、本庄栄治郎の『日本財政史』のほか、高田保馬の著作などは特に、当時の『京都帝国大学新聞』の書評欄や新刊書の紹介欄にも取り上げられており、学生たちにも広く読まれていたと考えられる。

雑誌に関しては、一九三二年の『学生生計調査報告』において、愛読雑誌の一位が『改造』、二位が『中央公論』であった（表1）ので、これらを中心とし、さらに当時、マルクス主義に関心を持っていた学生が少なくなかったことを踏まえて、プロレタリア文学を中心とした『戦旗』も数冊並べている。

学生下宿復元（1930年ごろ）

机、書棚部分の拡大

表1　愛読雑誌、愛読新聞

愛読雑誌		愛読新聞	
『改造』	389	『大阪朝日』	1452
『中央公論』	359	『大阪毎日』	519
『経済往来』	91	『読売』	166
『文芸春秋』	54	『東京毎日』	27
『キング』	10	『英文毎日』	10

（『京都帝国大学学生生計調査報告』1932年より）

間取り・位置・調度

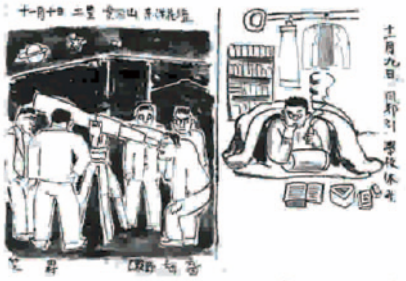
学生はどんなところに住んでいたのか。これを知るために用いた主な資料は、京都帝国大学学生課による『京都帝国大学学生生計調査報告』（一九三二年）と、田村雄一（故人、理学部名誉教授）による『漫画日記』である。

まず、学生の居住場所としては同調査報告の回答者二八一七名のうち、下宿（下宿屋および素人下宿。以下同じ）が一七九四名（六四％）であり、寄宿舎の一六〇名（六％）、自宅の四四八名（一六％）と比べて圧倒的に多い。その下宿の所在地は京都市左京区に一六三三名（九一％）が集中しており、そのなかでは白川が三四一名、浄土寺が三一六名、吉田が三〇三名などとなっている。ここでは、学生の下宿の位置を、今も学生の下宿が並ぶ吉田神楽岡と設定し、窓からの眺めとして、真如堂を望む景色を撮影した。また、同じ調査によると、下宿の広さは、六畳が一〇〇九名で、五畳以下一四一名、八畳一八八名などとなっている。よってここでは六畳間と設定した上で、そのうち机周りの三畳分を再現した。

次に、学生の部屋の雰囲気や調度品については、一九三一年の『漫画日記』に描かれている雰囲気を参考にした。例えば「十一月九日、風邪引　学校休み」（①）には、鴨居のようなところに服と帽子がかかっており、その横に本棚があるという様子が、「十一月十八日　夜は勉強　Millikanを読む」（②）には引き出しつきの座机を使っている様子が、また「十二月廿二日　十銭の饅

『漫画日記』③

『漫画日記』②



『漫画日記』①

頭＝四杯の汁粉」（③）には、布団を敷いた横の火鉢にやかんが置かれている様子が描かれている。また、①を参考に灰皿もおいたが、当時の学生は煙草を吸う者が多く、特に法学部と経済学部ではその比率が高かったことが『学生生計調査報告』のデータからも明らかである（表2）。

表2　喫煙者比率

	法	医	工	文	理	経	農	計
喫煙者／回答者	616／923	169／347	208／400	204／394	75／181	248／363	112／209	1632／2817
比率	67%	49%	52%	52%	41%	68%	54%	58%

（『京都帝国大学学生生計調査報告』1932年より）

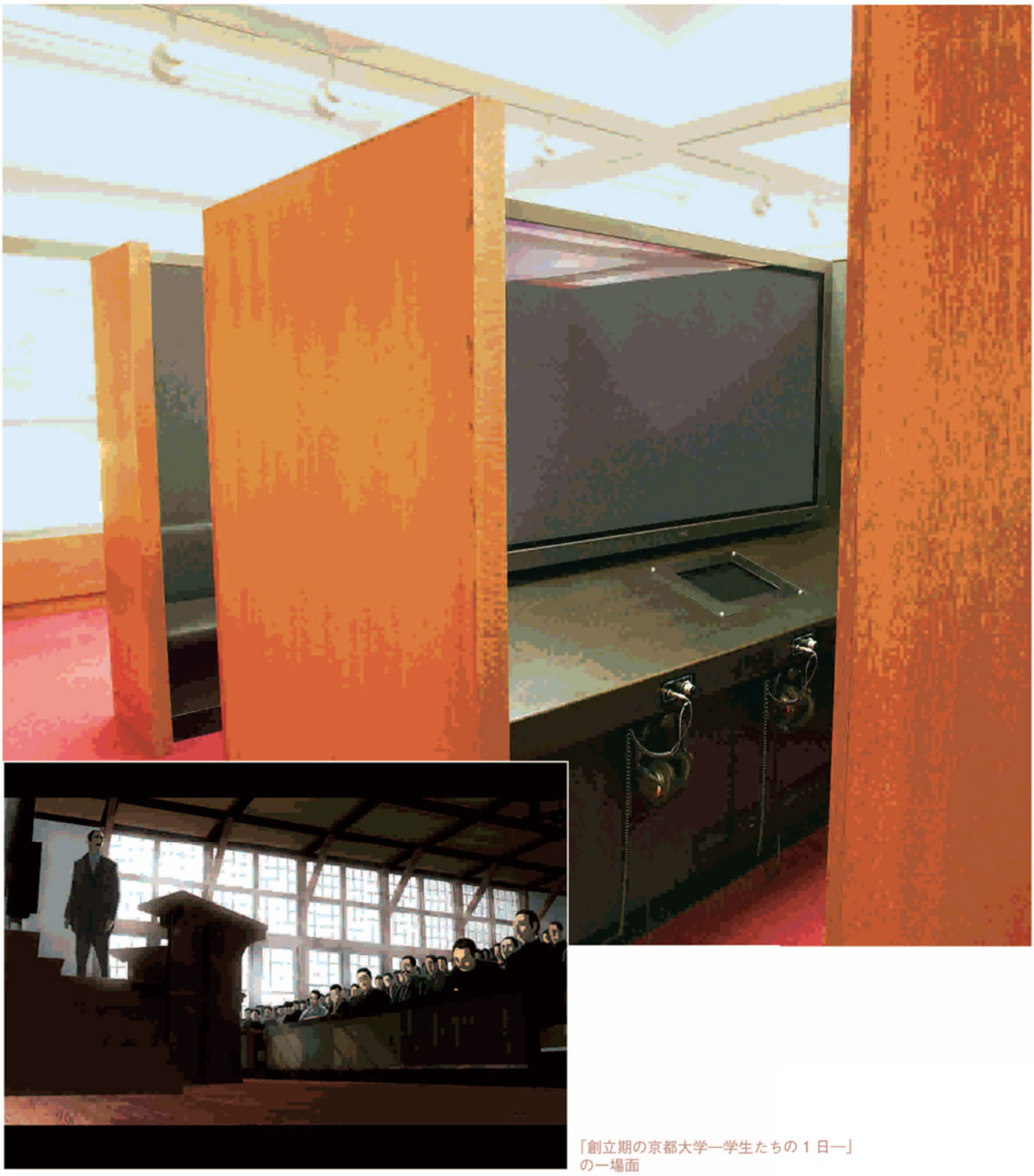
映像ブース

映像ブースでは、次の七種類のコンテンツを選択して鑑賞できるようになっている。

■京都大学創立百周年記念映画「京都大学の百年」
■キャンパスの変遷―立体パノラマ―
■創立期の京都大学―学生たちの一日―
■CGで見る医科大学キャンパス
■京都大学文化財紹介
■京都大学History～建物は時を語る
■KYOTO UNIVERSITY（日本語、英語、中国語、ハングル）

このうち、「創立期の京都大学―学生たちの一日―」は、舞台を京大が総合大学としての体裁を整えはじめる一九〇九（明治四二）年に設定し、朝の通学風景から、大教室での講義、実習、少人数の演習、図書館、寄宿舎での食事などの様子を一連のストーリー展開として一〇分程度の2Dおよび3DのCG映像で描いたものである。図面や写真をもとに当時のキャンパスを正確に再現するとともに、例えば当時構内では松茸を採ることができたといったエピソードも入れて、学生たちの一日を生き生きと再現できるように努めた。

なお、「キャンパスの変遷―立体パノラマ―」「創立期の京都大学―学生たちの一日―」「CGで見る医科大学キャンパス」は、学術情報メディアセンターコンテンツ作成室と大学文書館が共同で制作したものである。



「創立期の京都大学―学生たちの１日―」の一場面

略年表

1897（明治30）年	創立
	理工科大学設置
1899（明治32）年	法科大学、医科大学設置
	図書館、医科大学附属医院設置
1906（明治39）年	文科大学設置
1914（大正 3）年	理工科大学、理科大学と工科大学に分離
1919（大正 8）年	法・医・工・文・理の各分科大学を学部に改称
	経済学部設置
1923（大正12）年	農学部設置
1925（大正14）年	時計台竣工
1933（昭和 8）年	滝川事件
1940（昭和15）年	学旗・学歌制定
1943（昭和18）年	学生の徴集猶予停止（「学徒出陣」）
1946（昭和21）年	最初の女子学生入学
1947（昭和22）年	京都帝国大学を京都大学に改称
1949（昭和24）年	新制京都大学発足
	教育学部、分校（のち教養部）設置
	湯川秀樹、ノーベル物理学賞受賞
1960（昭和35）年	薬学部設置
1969（昭和44）年	大学紛争
1992（平成 4）年	総合人間学部設置
	大学院重点化の開始
2003（平成15）年	大学院工学研究科、桂キャンパスへの移転開始
2004（平成16）年	法人化に伴い、国立大学法人京都大学となる

「ヒゲ党」を気取る学生たち（1910年頃）

東一条交差点付近で語らう学生たち（1937年頃）

フォークソングを歌う学生（1977年頃）

発　　行 京都大学大学文書館・京都大学総務部広報課
発 行 日 2011年3月31日(第二版)
編集協力 エディシオン・アルシーヴ　デザイン 鷺草デザイン事務所